

Self-Esteemからみた女性の独立意識

- 発達の観点から，青年期後期と成人期前期の比較 -

三 田 英 二

Women's Awareness of Independence Examined from Viewpoint of Self-Esteem

Eiji MITA

本研究は，複雑と指摘される女性の自己形成を検討する一環として行われた。

青年期後期段階から成人期前期段階の独立意識の変化を発達の観点から検討することを目的としている。

調査対象者は，青年期後期群として，女子学生 90 名（平均年齢 19.18 歳，SD=.76，range18-21）。成人期前期群として，女性 73 名（平均年齢 25.12 歳，SD=1.96，range22-29）である。

加藤・高木（1980）が作成した独立意識尺度を因子分析した三田（2003）の結果を用い，抽出された 5 因子を目的変数とし，Rosenberg self-esteem 尺度を因子分析した結果（三田，2000）抽出された 3 因子を説明変数とし，青年期後期群・成人期前期群別々に重回帰分析を行った。

その結果，2 つの特徴的な結果が得られた。第 1 点目は，青年期後期群が重回帰分析の結果，親との関係を示す目的変数で重相関係数が有意ではなかったことである。第 2 点目は，青年期後期群も成人期前期群もともに目的変数「親への依存」因子で重相関係数が有意ではなかったことである。

この 2 点中心に考察が行われた。

1. はじめに

本研究は、複雑と指摘される女性の自己形成を検討する一環として行われている。

青年期において、親からの心理的独立が自己形成過程上重要な課題の一つとして一般的に認められているが、親子関係は時代により異なる。日本において、自らが産んだ子どもを自らが育てることが一般化していくようになるのは大正期からだという(広田, 1999)。

また、青年期が“文化的に作られた発達段階”と比喻されるのは、社会経済構造の発展過程で、生物学的には成人でも社会的には成人とは認められない発達段階が出現したことがその一因といわれる。親からの独立意識も親子関係や社会経済的構造の変化から青年期の重要な課題となっていくと推定される。

多くの人格発達理論が“依存から自立”という発達の方向性を示している。しかし、文化心理学の知見から、文化により、自己形成過程は異なることも示唆されている。文化的自己観について北山(1997)は次のように述べている。「…ある文化において歴史的に形成され、社会的に共有された自己、あるいは人一般についてのモデル、通念、あるいは、前提のことである。…心理的プロセスを構成する一要因になる。…」(p.25)。そして、日本で優勢な自己観を「相互協調的自己観」とし、“依存から自立”を目指すいわゆる欧米的な「相互独立的」な自己形成過程と異なることを示唆している。また、自己形成過程には性差があることも多くの研究者から指摘されている。

このように、独立意識を含めた自己形成過程は、時代背景や生物学的・社会的・文化的差異により、異なるものと考えた方が妥当なものと考えている。まして常に変貌を続けている“青年像”である。常に問い直しを続けなければならない領域でもあると思う。

独立意識については、本研究でも使用する独立意識尺度の制作者である加藤・高木(1980)が「青年期における依存から独立への過程の解明は、青年研究において中心となる課題の1つ…課題の重要性にもかかわらず、独立への過程がいわゆる実証的レベルで十分解明されてきたとはいいがたい…」と述べ、質問紙を作成し因子分析の結果、「独立性」、「親への依存性」、「反抗・内的混乱」の3因子を見いだした。そして、女性の自己形成について、「親への依存性が中学生よりも高校生、大学生の方が高くなっており、女子においては親への依存性が必ずしも独立の障害にはならないことを示している…」と述べている。そして、抽出された3因子を男女別に相関をとり、その相関パターンが異なることから、「親への依存性」は男女で意味が異なることを示唆し、「女子においては「親への依存性」は心理的安定と関係していると思われる。」と指摘している。

青年期での分離個体化について検討した高橋(1989)は、性差については言及していないが、青年期の親子関係の発達について、「…中学1年まではまだ幼児対象との共生的な関係が残っている段階であり、中学2年頃から分離個体化のさまざまな変化や自我の退行などの危機が起こり、大学入学後徐々に分離個体化が達成され始め、青年の自我は安定していく…」と述べ、分離個体化過程の中で、自我が弱化し退行の引き起こされる危機的な時期があることを指摘した。そして、「…依存的な関係が親和的な日本では分離個体化という課題は難しくなっているのではないかと…またこの分離個体化過程を経てある種の両親への依存は解消されるが、あるもの - 「甘え」(土居, 1971) - は青年期以降も継続される。」と考察している。

また、青年期後期の親子関係について検討した小高(1998)は、他の研究結果や自身の

研究結果から，青年の親に対する態度・行動は，「親への親和志向の因子」と「親からの客観的独立志向の因子」の2因子に集約できると述べている。ただ，小高（1998）の研究も性差については言及されていない。

加藤・高木（1980）が作成した独立意識尺度を青年期後期の女性と成人期前期の女性を対象として因子分析を行った三田（2003；付録1参照）の結果は，5因子が抽出され，概ね，親との関係を示す因子と同一性形成に関係する因子とに分かれた。独立意識の構成要素としては，加藤・高木（1980）と異なる調査対象者であるが，概ね同様の結果が得られた。

親との関係を示す因子として，「親への依存」，「自信の欠如による親への服従（以下，「親への服従」と略記）」が挙げられ，同一性形成を示す因子は，「自己決断力」，「時間的展望の拡散（以下，「展望拡散」と略記）」である。「反抗期心理」も抽出され，この因子は，親子関係を示すとともに同一性形成のための因子とも考えられる因子である。

また三田（2006）は，抽出された独立意識尺度の5因子を目的変数とし，性格特性（YG検査）を説明変数として，女性の独立意識を発達的な観点（青年期後期と成人期前期の比較）から検討するため，重回帰分析を行った。

この結果，女性の独立意識の特徴として以下の2点考えられた。第1に，性格特性に影響される独立意識から，性格特性に影響されない独立意識へと変化していくこと。第2に，消極的ながらも相互協調的な対人関係を保ちながら，その中で自律的な行動がとれることを目指すこと。

しかし，「親への依存」因子は，青年期後期段階・成人期前期段階ともに重相関係数は有意ではなく，性格特性との因果関係が認められなかった。加藤・高木（1980）が「女子においては「親への依存性」は心理的安定と関係していると思われる。」と指摘したことも確認できず，女性の親への依存性について多くの不明な点が残った。

Self-Esteem(以下，SEと略記)は，自己概念の一側面であり(Epstein，S.，1973；Shavelson，R. J.，& Bolus，R. 1982)、自己概念に伴なうところの価値的側面(菅，1975)、個人が自分自身に対して持つ個人的な価値的判断(Coopersmith，S.，1967)であり，Jacobson，E.(1964)は「自己価値(Self-Esteem)は自己評価(Self-Evaluation)の観念的表現，とりわけ情緒的表現である。」(p.124)と述べている。発達的には，重要な他者(significant others)との相互作用を通じて形成されるものとされる。そして，Erikson，E.H.(1959)は，SEを同一性形成を促すエネルギー源と考えている。

子どもにとり親は出生以来「重要な他者」であり，青年期においても親は「一般的に，この時期の対人関係は，親子関係よりもむしろ友人関係や異性関係の方に彼らの関心の重点が置かれるように思われる…しかしながら，実際には…親と子の関係はその基底において継続するのである。そしてその関係は様々な研究からも窺われるように青年にとって重要な意味を持つ…」(小高，1998)存在である。すなわち，独立意識形成においてSEは重要な要因となる概念である。

本研究では，性格特性を説明変数として女性の独立意識を検討した前研究(三田，2006)に引き続き，女性の独立意識をSEから検討することを目的とする。また，前研究同様，青年期後期と成人期前期を比較することで女性の独立意識の形成過程について発達の観点から考えていきたいと思う。

．方法

1．調査対象者

調査対象者は、青年期後期群として、女子学生 90 名（平均年齢 19.18 歳，SD=.76，range18-21）。成人期前期群として、女性 73 名（平均年齢 25.12 歳，SD=1.96，range22-29）。

青年期後期群は、授業中に調査用紙を配布・回収し、成人期前期群は、郵送により配布・回収した（回収率 55 %）。

なお、青年期後期群・成人期前期群の両調査対象者について、プライバシー保護の観点から婚姻の有無の調査はしなかった。

2．用具

（1）独立意識の測定

加藤・高木（1980）の独立意識尺度を用いた。分析にあたっては三田（2003；付録 1 参照）が因子分析した結果を用いる。第 1 因子「自己決断力」（項目 4，5，6，7，8，9，10，35，36），第 2 因子「親への依存」（項目 20，21，22，23，24，25，27，33），第 3 因子「展望拡散」（項目 3，13，14），第 4 因子「反抗期心理」（項目 28，30，31，37），第 5 因子「親への服従」（項目 17，18，26，29，34）の 5 因子が抽出されている。

各項目ごと「全く自分にあてはまる」から「全く自分にあてはまらない」までの 5 件法により回答を求め、「全く自分にあてはまる」を 5 点とし、順次「全く自分にあてはまらない」まで 4、3、2、1 点として処理を行った。理論上の得点範囲は、第 1 因子「自己決断力」9 点から 45 点，第 2 因子「親への依存」8 点から 40 点，第 3 因子「展望拡散」3 点から 15 点，第 4 因子「反抗期心理」4 点から 20 点，第 5 因子「親への服従」5 点から 25 点となる。

各因子の内的整合性係数（ α ）も検討されている（三田，2003）。第 1 因子 .850，第 2 因子 .876，第 3 因子 .809，第 4 因子 .619，第 5 因子 .680 と第 3 因子まで良好な値を示している。

（2）Self-Esteem の測定

SE を測定する用具として、Rosenberg self-esteem 尺度（以下 RSE と略記）を使用した。この RSE は、10 項目という非常に短い構成になっているため、被験者に負担が少なく、また、他の外的変数との組み合わせも容易とされている。そして、全般的な SE を測定する尺度として利用されることも多い。しかし、その短さゆえに因子構造について、単一構造という説や、複数の下位因子からなる尺度という指摘もある（Wylie,R.C.1974）。今回の調査データから内的整合性係数（ α ）を算出したところ、RSE 全体では、.810 と良好な値を示した。このため、RSE は単一構造として考え使用した方が良いのかもしれない。しかし、今回調査では、より詳細に検討したいと考えているため、因子分析した結果を用いる。複数の下位因子に分かれるため内的整合性係数は低下すると考えられる。

以上のように、内的整合性係数の低下が危惧されるが、上述の目的のため、RSE を因子分析した結果、最も多く下位因子を抽出している三田（2000；付録 2 参照）の結果を今回用いることにする。第 1 因子「自己矮小感」（項目 2，5，6，8，9），第 2 因子「自

負心」(項目3, 4, 7), 第3因子「自己肯定感」(項目1, 10)となっている。今回データから内的整合性係数を算出したところ, 第1因子「自己矮小感」は.756, 第2因子「自負心」.618, 第3因子「自己肯定感」.498であった。第1因子はある程度の内的整合性係数の値は確保できたが, 予想通り, 特に項目数が少ない第3因子は低い値となった。

評点は, 独立意識尺度との整合性をとるため, 『ほとんど思わない』から『非常にしばしば思う』までの5件法により回答を求めた。理論上の得点範囲は, 第1因子「自己矮小感」5点から25点, 第2因子「自負心」3点から15点, 第3因子「自己肯定感」2点から10点となる。高得点の方が高SEとなる。第1因子「自己矮小感」は, 高得点は矮小感が弱いことを示し, 低得点が矮小感が強いことを示すことになる。

Table 1 独立意識尺度の各下位因子の
青年期後期群と成人期前期群の平均値の差の検定(三田, 2003)

		人数	平均値	標準偏差	t 値	自由度	p
自己 決断力	青年期後期群	90	29.93	6.22	-2.432	167.35	*
	成人期前期群	80	32.06	5.19			
親への 依存	青年期後期群	90	24.48	6.24	0.373	168	N.S.
	成人期前期群	80	24.10	6.97			
時間的 展望の拡散	青年期後期群	90	7.38	3.16	1.855	167.92	+
	成人期前期群	80	6.54	2.75			
反抗期 心理	青年期後期群	89	12.51	2.95	3.176	167	**
	成人期前期群	80	11.06	2.95			
親への 服従	青年期後期群	90	11.86	3.37	1.200	168	N.S.
	成人期前期群	80	11.26	3.04			

(注) + p<.10 * p<.05 ** p<.01

・結果

本研究は継続研究である。本研究と同一データで独立意識尺度を因子分析した結果, 抽出された各因子の得点は, 青年期後期群・成人前期群間でt検定が行われている(三田, 2003)。参考までに結果を示しておく(Table 1)。

また, RSE についても同様にt検定が行われている。これも参考までに結果を示しておく(三田, 2001; Table 2)。

独立意識尺度において青年期後期群・成人期前期群を比較すると, 自己決断力は成人期前期群の方が高いこと, 将来に向けた不安は, 青年期後期群の方が高いこと, 反抗期的心理状態が青年期後期群の方が高いことを示す結果が得られたが, 親に依存する・服従するといった因子では, 青年期後期群・成人期前期群間で差異が見られなかった。

RSE では, 青年期後期段階から成人期前期段階にかけて, 全般的にSEが向上したことを示している。

Table 2 RSEの各下位因子の

青年期後期群と成人期前期群の平均値の差の検定(三田, 2001)

		N	平均	SD	t 値	df	
自己矮小感	青年期後期群	90	13.64	3.93	-1.72	163	+
	成人期前期群	75	14.68	3.74			
自負心	青年期後期群	90	9.57	2.22	-1.92	163	+
	成人期前期群	75	10.19	1.86			
自己肯定感	青年期後期群	90	5.63	1.78	-2.93	163	***
	成人期前期群	75	6.40	1.53			
RSE 合計	青年期後期群	90	28.84	6.60	-2.51	163	*
	成人期前期群	75	31.27	5.61			

(注) + p<.10 * p<.05 *** p<.005

独立意識尺度で抽出されている5因子を目的変数とし, RSEの3ケの下位因子を説明変数として, 青年期後期群, 成人期前期群別々に重回帰分析を行った。この結果を, 青年期後期群をTable 3に, 成人期前期群をTable 4に示す。

青年期後期群 (Table 3) では , 目的変数「自己決断力」と目的変数「展望拡散」だけで重相関係数が有意になった。

Table 3 重回帰分析結果 (青年期後期群)

	自己決断力	親への依存	展望拡散	反抗期心理	親への服従
自己矮小感	.150		.019		
自負心	.141		.055		
自己肯定感	.402****		-.564****		
重相関係数	.586****	.146	.530****	.255	.248
決定係数	.343	.021	.281	.065	.062

* ... p<.05 , ** ... p<.01 , *** ... p<.005 , **** ... p<.001

重相関係数が有意となった目的変数で , 説明変数が有意となったのは , 目的変数「自己決断力」で説明変数「自己肯定感」, 目的変数「展望拡散」でも同様に説明変数「自己肯定感」であった。

これらことは , 「自己決断力」の高さは「自己肯定感」の高さに起因し , 将来展望が拡散してしまうのは「自己肯定感」が低いことに起因していることを示している。

成人期前期群 (Table 4) では , 目的変数「親への依存」因子で重相関係数が有意ではなく , 他の目的変数の重相関係数は有意となった。

Table 4 重回帰分析結果 (成人期前期群)

	自己決断力	親への依存	展望拡散	反抗期心理	親への服従
自己矮小感	.162		-.275*	-.423***	-.239
自負心	-.011		.107	-.083	.000
自己肯定感	.343*		-.333*	.227	-.177
重相関係数	.457****	.158	.526****	.347*	.357**
決定係数	.209	.025	.277	.120	.141

* ... p<.05 , ** ... p<.01 , *** ... p<.005 , **** ... p<.001

重相関係数が有意となった目的変数で , 説明変数が有意となったのは , 目的変数「自己決断力」では説明変数「自己肯定感」, 目的変数「展望拡散」では「自己肯定感」と「自己矮小感」, 目的変数「反抗期心理」では説明変数「自己矮小感」, 目的変数「親への服従」では有意な説明変数は見られなかった。

これらことは , 「自己決断力」の高さは「自己肯定感」が高いことに起因し , 将来の展望が拡散してしまうのは「自己肯定感」が低いことと「自己矮小感」が強いことに起因し , 反抗的な心理状態になってしまうのは「自己矮小感」が強いことに起因していることを示している。なお , 目的変数「親への服従」では有意な説明変数は見られなかった。

・考察

測定尺度の信頼性係数が低いため留保付きの結果と考えられるが、今回調査では、2つの特徴的な結果が得られた。第1点目は、青年期後期群が重回帰分析の結果、親との関係を示す目的変数で重相関係数が有意ではなく因果関係が見られなかったことである（Table 3）。第2点目は、青年期後期群も成人期前期群もともに目的変数「親への依存」因子で重相関係数が有意ではなく、第1点目同様に因果関係が見られなかったことである（Table 3, 4）。この2点を併せて考察していくこととしたい。

青年期後期段階では、同一性形成に関連する因子と考えられる目的変数「自己決断力」と目的変数「展望拡散」では、説明変数「自己肯定感」の得点の高低がその予測因となっており、親との関係を考えなければ、Erikson, E.H. (1959) が述べたように、同一性形成や心理的自立に対して SE が重要な役割を演じている様相が伺える。

三田 (2004) は、「青年期後期における女性の自己形成は、相対的に自己を把握することで、「外面 - 内面」の軸よりも「肯定 - 否定」の軸から分化が始まると推測される。そして、自己の否定的側面の受容・確立を目指し、歩み始めると考えられる。このため、青年期を通し、自己の否定的側面が自己形成に重要な役割を果たすことになる。しかし、何故「重要である」のかと考えたとき、自己の外面的で否定的な側面は内的準拠枠ではなく、自己の内面的な未熟さを覆い隠すための“壁”としての機能を担っているから「重要である」のではないかと思われる。真の内的準拠枠は“壁”の中にこそあり、“壁”は、自己に対する否定的な評価を他者から受けたときに、それが自己意識全体に影響し、直線的な自己否定へとつながらないように緩衝装置 (buffer) としての役割を演じる…」と述べている。

本研究での青年期後期段階では、同一性に関連すると考えられる2つの目的変数（「自己決断」と「展望拡散」）だけで有意な重相関係数が得られた (Table 3)。そして有意な予測因となったのは「自己肯定感」であった。RSE は、「他者から何といわれようが…」といった他者との関係における SE（「自負心」）と漠然とした自分自身への肯定感（「自己肯定感」）と漠然とした自分自身への過小評価（「自己矮小感」）といった他者とは分離した形の SE から構成されている（付録2参照）。

結局、親との親和性を維持しながら、他者から分離した内面的な SE によって「自分らしさ」（同一性）を形成し、成熟させようとしているのではないだろうか。文化的な要因からか、SE を“個”としての確立のためのエネルギー源とするのではなく、親との親和性を維持しながらも“自律的”な行動がとれるように、内面的な成熟が達成されるように SE を用いた結果ではないだろうか。このことは、男性との比較を行っていないので、女性の特徴とまでは言い切れないが、Fairbairn, R. (1952/1995) が示した発達過程 - 「乳児的依存の段階」から「成熟した依存の段階」 - ととも符合する結果と思われる。

また、青年期後期段階で目的変数「親への依存」で重相関係数が有意ではなく因果関係が見られなかったことは、親との間に明確な自他の分化がないことを示している結果かもしれない。前述した「…実際には…親と子の関係はその基底において継続するのである。そしてその関係は様々な研究からも窺われるように青年にとって重要な意味を持つ…」 (小高, 1998) ことや「…依存的な関係が親和的な日本では分離個体化という課題は難しくなっているのではないかと…またこの分離個体化過程を経てある種の両親への依存は

解消されるが、あるもの - 「甘え」(土居,1971) - は青年期以降も継続される。(高橋,1989) ことなどから考えれば、青年期後期段階でも、青年と親は何らかの心理的な融合状態にあることが考えられる。高橋(1989)が指摘したような「自我が弱体化」した結果、依存性が強くなるか否は、本研究のデータからは言及できないが、それよりもむしろ、「親への依存」とSEに因果関係が見られないことや、加藤・高木(1980)の「女子においては「親への依存性」は心理的安定と関係していると思われる。」と併せて考えれば、いわば親は“自己対象”的に存在していると推測される。あるいは、小高(1998)が指摘した青年の親に対する態度・行動の2因子のうち、女性の場合「親への親和志向」が大変強いものになっているとも考えられる。“自己対象”であるが故に、親に対して“依存している”とか“反抗している”ということが意識されない(因果関係が見られない)のではないだろうか。

もし、親との間に自他の分化があり、親が青年の“心理的自立”を阻害する要因となっていれば、親に拘束されたことで青年のSEは傷つけられ、そのことに対して、親に反抗・反発することが考えられ、反抗・反発の結果として、SEは目的変数「反抗期心理」と有意な因果関係を持ち、予測因となっても不思議ではない。

成人期前期段階に入ると、「自己決断力」やSEが向上したり、将来展望が開けたりすることで、“壁”の中の内面性が成熟して来て、徐々に親は“自己対象”的な存在ではなくなる。親との間に自他の分化がなされた結果、親に対して反抗するとか服従するといったことが意識されるようになり、青年期後期段階では見られなかった目的変数「反抗期心理」や「親への服従」といった因子で因果関係が見られるようになるのではないだろうか。ただ、「親への依存」因子では因果関係が見られず、親との親和性は成人期前期段階でも継続しているものと推測できる。

今回データからは明言できず今後の検討課題となるが、目的変数「親への依存」因子が、青年期後期群・成人期前期群ともに重相関係数が有意ではなく因果関係が見られないのは、外面的で否定的な自己の側面を重視するという女性の自己認知の特徴と同様に、親を“自己対象”的な存在とすることで、“壁”としての役割を担ってもらっているためかもしれない。

性格特性から独立意識を検討した前研究においても、SEから検討した本研究においても「親への依存」因子は不明な点が多く残る。青年期での青年自身の自己形成だけの問題だけでなく、親の養育態度の時代的な変化もその一因となっている可能性も高い。今後とも検討を重ねていきたいと考えている。

< 引用文献 >

Coopersmith, S. 1967 The antecedents of self-esteem. San Francisco :W.H. Freeman.

土居健郎 1971 「甘えの構造」 弘文堂

Epstein, S. 1973 The self-concept revisited, or a theory of a theory. American Psychologist, 28, 404-416.

Erikson, E.H. 1959 Identity and life cycle 小此木啓吾(訳編) 1973 自我同一性 誠信書房

Fairbairn, R. 1952 Psychoanalytic studies of the personality. 山口泰司(訳) 1995 人格の精神分析 講談社学術文庫

- 広田照幸 1999 日本人のしつけは衰退したか - 「教育する家族」のゆくへ - 講談社現代新書
- Jacobson, E. 1964 The self and object world. 伊藤洸 (訳) 1981 自己と対象世界 : アイデンティティの起源とその展開 岩崎学術出版
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- 北山忍 1997 文化心理学と何か 柏木恵子・北山忍・東洋 (編) 文化心理学 - 理論と実証 - 東京大学出版 Pp.17-43.
- 小高恵 1998 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究 46, 333-342
- 三田英二 2000 Self-Esteem と社会態度に関する因子分析的研究 静岡県立大学短期大学部研究紀要 13-2 247-266
- 三田英二 2001 青年期から成人期にかけての Self-Esteem の発達の变化に関する一研究 - 女子を被験者として、性格特性からの検討 - 日本心理学会第 65 回大会発表論文集 952
- 三田英二 2003 独立意識からみた女性の自己の発達 青年心理学研究, 15, 1-15
- 三田英二 2004 「独立意識からみた女性の自己の発達」へのコメントに対するリプライ 青年心理学研究, 16, 46-51.
- 三田英二 2006 性格特性からみた女性の独立意識 (2) - 発達の観点から, 青年期後期と成人期前期の比較 - 静岡県立大学短期大学部研究紀要 19-W 9 1-13
- Shavelson, R.J., & Bolus, R. 1982 The self-concept interplay and theory. Journal of Educational Psychology. 74, 3-17.
- 菅佐和子 1975 Self-Esteem と対他者関係に関する一研究 教育心理学研究, 23, 224-229.
- Silverberg,W.V. 1952 Childhood experience and personal distiny. New York:Springer.
- 高橋蔵人 1989 青年期における分離個体化に関する研究 心理臨床学研究, 7, 2, 4 -14.
- Wylie,R.C. 1974 The self-concept.vol.1,Linclon:University of Nebraska Press.

付録 1 独立意識尺度の因子分析結果 (回転後)

(三田, 2003 を一部改変)

		共通性
6 . 人の意見もよく聞くが、最終的には自分で決断できる。	.740 -.014 -.031 .036 -.056	.553
8 . まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる。	.712 .046 .016 .294 -.109	.608
5 . 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	.699 .008 -.257 -.077 .038	.562
36 . どうしたらよいのか、自分で決心できないことが多い。	-.661 .139 .276 .278 .275	.686

4 . 自分自身の判断に責任を持って行動することができる。	.625	-.125	.026	-.135	-.059	.429
35 . 他人の意見や流行に、つい引き込まれてしまう。	-.585	.049	.043	.203	.237	.443
7 . 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。	.583	.227	-.345	.115	.108	.535
10 . 自分の意見を言えずに、相手に従ってしまうことが多い。	-.570	.190	.222	-.111	.262	.491
9 . 小さなことでも、自分で決断することができない。	-.519	.026	.186	.120	.216	.366
22 . つらい時、悲しい時に、親のことがまず頭に浮かぶ。	-.035	.831	.051	.002	.059	.698
20 . 親といるだけで何となく安心できる。	-.060	.795	.148	-.067	.021	.662
24 . 親は自分の心の支えである。	.014	.786	.014	.030	.018	.620
23 . できることなら、いつも両親と一緒にいたい。	-.014	.783	.026	-.056	.057	.620
21 . 困った時は親に頼りたくなる。	-.141	.714	.149	.010	-.025	.553
25 . 何かする時には、親にはげましてもらいたい。	-.049	.653	-.078	.260	.312	.600
33 . 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気にはなれない。	-.143	-.645	.048	.259	.160	.531
27 . 親には何かにつけ、味方になってもらいたい。	-.073	.543	-.086	.256	.382	.519
14 . 将来、どんな職業についたらよいかわからない。	.015	.062	.857	.028	.126	.755
13 . 自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。	-.194	-.005	.758	.150	-.010	.635
3 . 時分の将来の進路や目標を自分で決めることができる。	.324	-.121	-.687	-.023	-.159	.618
31 . 両親について反抗し、あとで後悔することが多い。	-.067	.177	.064	.698	-.180	.560
30 . 親や先生のいうことには、たとえ正しくても反対したくなる	-.010	-.030	.063	.691	-.098	.492
28 . 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになる ことが多い。	.113	-.325	.110	.575	-.031	.461
37 . いつでも相手になってくれる友達がほしい。	-.290	.113	-.047	.531	.066	.385
18 . 親にさからえないで、言うとおりになっしまいやすい。	-.124	.025	.141	-.033	.748	.597
29 . 親の言うことには素直に従っている。	.007	.295	.029	-.329	.637	.602
26 . 自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている	-.065	.469	.035	.153	.543	.544
34 . 親に対して自分の意見を主張したいが、自信を持ってない。	-.267	-.300	.031	.213	.526	.484
17 . たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひけめを感じる ことはない。	.279	.003	-.110	.037	-.517	.359
1 . 自分の人生を自分で築いていく自信がある。	.495	-.014	-.472	-.159	-.112	.506
2 . 人生で出会う多くの困難は、自分の力で克服することができる と思う。	.291	-.023	-.363	-.248	.079	.285
11 . 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。	.466	.119	-.423	.026	.015	.412
12 . 自分の考えが変わりやすく自信をもてない。	-.488	.070	.171	.413	.145	.464
15 . 自分の意志で、欲望や感情をコントロールする(がまんしたり、 調節したりする)ことができる。	.134	.029	-.155	-.493	-.246	.346
16 . 自分の考えや行動を抑えられたり、統制されたりすることに	.151	-.097	-.229	.418	-.034	.261

は強い反発を感じる。						
19. 外から与えられたわくの中で生活する方が安心できる。	-.148	.133	.481	-.049	.334	.385
32. 大人に対してひけめを感じることも多い。	-.081	.116	.259	.446	.304	.378
	二乗和	7.48	4.83	2.85	2.02	1.83
	寄与率(%)	20.2	13.0	7.7	5.5	4.9
		.850	.876	.809	.619	.680

付録2 RSEの因子分析結果(回転後)

(三田, 2000を一部改変)

				共通性	
2	私は時々、自分がてんでだめだと思う。	.724	-.152	-.014	.547
5	私にはあまり得意に思うことはない。	.444	-.358	-.324	.430
6	私は時々たしかに自分が役立たずだと感じる。	.708	-.133	.022	.519
8	もう少し自分を尊敬できたならばと思う	.595	.287	-.256	.501
9	どんな時でも例外なく、自分を失敗者だと思いがちだ。	.583	-.312	-.198	.476
3	私は、自分にはいくつか見どころがあると思っている。	-.169	.597	.382	.531
4	私はたいていの方がやれる程度には物事ができる。	-.113	.748	.006	.572
7	私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値ある人だと思う。	-.089	.819	.075	.685
1	私はすべての点で自分に満足している。	-.125	-.003	.745	.570
10	私は自分自身に対して前向きな態度をとっている。	-.044	.195	.738	.585
	二乗和	3.03	1.34	1.04	
	寄与率(%)	30.23	13.42	10.42	
		.658	.667	.430	

(2007年3月26日 受理)